

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.213

2011年2月

全学同窓会関西支部第6回総会を開催



I Nagoya Universitet har jag fått många nya vänner som gör mina studier här oförglömliga. Tack!

いっしょに学んでいるたくさんの新しい友だちが、思い出の地、名古屋大学でできました。ありがとうございます！

Los programas de japonés de la Universidad de Nagoya son increíblemente variados y útiles. El campus se encuentra muy bien ubicado y ofrece un entorno idóneo para estancias de estudios para los estudiantes internacionales.

名古屋大学の日本語プログラムは、本当にバラエティ豊かで役に立ちます。キャンパスも便利な場所にあり、留学生にとっては勉強にとってもよい環境です。



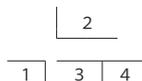
<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

## 目次

●ニュース	
全学同窓会関西支部第6回総会を開催	3
大学入試センター試験が実施される	4
年末キャンパススクリーンを実施	4
●知の未来へ	
地球を巡る大気汚染物質と気候影響 ～数値モデルで明かす実態～ 須藤 健悟（大学院環境学研究科准教授）	5
●知の先端	
水を使って絶縁体から効率のよい熱電材料を作製 太田 裕道（大学院工学研究科准教授）	6
●部局ニュース	
高等教育マネジメント分野創設10周年記念シンポジウムを開催	8
経済学研究科セミナーを開催	8
名古屋公共経済学・マクロ経済学コンファレンス2010を開催	9
平成22年度オープンシンポジウムを開催	9
第3回医学・バイオ系知財フェアを開催	10
第23回年代測定総合研究センターシンポジウムを開催	10
アメリカ大学院留学シンポジウムを開催	11
グリーンモビリティ連携研究センターの看板上掲式を挙	11
第20回博物館企画展「響け！創統の鐘」を開催	12
博物館特別企画「恐竜たちがやってきた」第2弾を開催	12
和式馬術部による流鏝馬供覧を開催	13
ミクロの探検隊「動物の体 ～組織～」を開催	13
●名大を表敬訪問された方々	14
●新たに締結した学術交流協定	14
●構成員を対象とした研修	15
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成22年12月16日～平成23年1月15日	16
●イベントカレンダー	18
●ちょっと名大史	
第5代総長 篠原 <sup>しのはら</sup> 卯吉 <sup>うきち</sup> — 名大をひきいた人びと⑩ —	20

# 全学同窓会関西支部第6回総会を開催





- 1 展示パネル
- 2 会場の様子
- 3 あいさつする総長
- 4 あいさつする寛支部長

名古屋大学全学同窓会関西支部第6回総会が、12月18日(土)、大阪市内の大阪弥生会館において開催されました。

全学同窓会関西支部は、関東支部、遠州会に次ぐ国内3番目の支部として平成16年11月に設立され、関西地区在住の同窓生の連携・交流及び本学への支援を目的に活動しています。当日は、会員約60名が出席し、本学の創立70周年記念行事において展示されたパネルの一部である、創基から名古屋帝国大学誕生までのパネルが展示されました。

総会では、三洋化成工業株式会社名

誉顧問である寛 哲男全学同窓会関西支部長の開会あいさつのもと、伊藤義人全学同窓会代表幹事から、昨年10月に開催された第6回名古屋大学ホームカミングデイの様子について紹介があり、その中で、海外支部の代表者を招へいし、交流を深めたこと、「名古屋大学国際交流貢献顕彰制度」の初の受賞者として韓国及びバングラデシュの支部長が表彰されたことなどについて報告がありました。

次いで、濱口総長から、「名古屋大学から Nagoya University へ」を推進するため、様々な施策実施に力を入れ

ていること、また、今年度、本学が主管校として開催した7大戦の戦績や、男女ともに全日本大学駅伝に出場し、特に男子は、国立大学から唯一の出場校であったことなどが紹介されました。

続いて、上田地球水循環研究センター長から「異常気象を考える」と題した講演が行われ、参加者の質問から、身近で起きる異常気象への関心の高さをうかがうことができました。

総会終了後の懇親会では、近況報告や卒業部局毎に総長を囲んで記念撮影が行われるなど、和やかなうちに終了しました。



## 大学入試センター試験が実施される

—本学関係会場で約7,000名が受験—

平成23年度大学入試センター試験が、1月15日(土)、16日(日)の2日間、全国706会場で実施され、本学関係では、東山キャンパスや学外の高等学校など合計8会場で約7,000名が受験しました。今年度の大学入試センター試験の全国志願者数は、前年度より5,616名(1.0%増)増えて558,984名となりました。



試験に臨む受験者

試験1日目は、午前8時すぎにはコートやマフラーで身を包んだ受験者が会場に集まり始め、参考書やノートで最終チェックをしたり、友人との会話でリラックスするなどして、各々の方法で試験に備えていました。また、東山キャンパスでは、高校毎に集合し、教師から激励を受け、健闘を誓う受験者の姿が見られ、8時30分の入室開始と同時に、次々と試験室へ入室しました。

試験2日目は朝方の冷え込みが厳しく、午前9時過ぎからあいにく雪の舞う天候となりましたが、午前中は交通機関の遅延等はほとんどなく、各試験場では予定どおり試験が実施され、無事に終了しました。

濱口総長と高橋局長が各試験場を訪問し、試験場主任及び教職員をねぎらいました。

なお、本学の前期日程試験は、2月25日(金)及び26日(土)に、また、後期日程試験(医学部医学科)については、3月12日(土)に実施されます。

## 年末キャンパスクリーンを実施

年末キャンパスクリーン(屋外清掃)が、12月15日(水)、全学の教職員及び学生約600名の参加を得て実施されました。

これは、例年6月に実施される環境美化週間「キャンパスクリーンウィーク」とともに、大学構内環境美化運動の一環として平成元年から実施しているものです。



事業所ごみとして分別する学生ボランティア

本部からは約120名が本部2号館玄関前に集合し、奥村施設管理部長のあいさつの後、一斉に東山キャンパス構内及び周辺市道に分かれ、空き缶・紙くず・落ち葉等の収集、側溝の清掃などの作業を行いました。

今後も年2回のキャンパスクリーンを継続して実施することにより、「ゴミのないきれいなキャンパス」を目指していきます。

# 地球を巡る大気汚染物質と気候影響

数値モデルで明かす実態

大学院環境学研究科准教授  
須藤 健悟

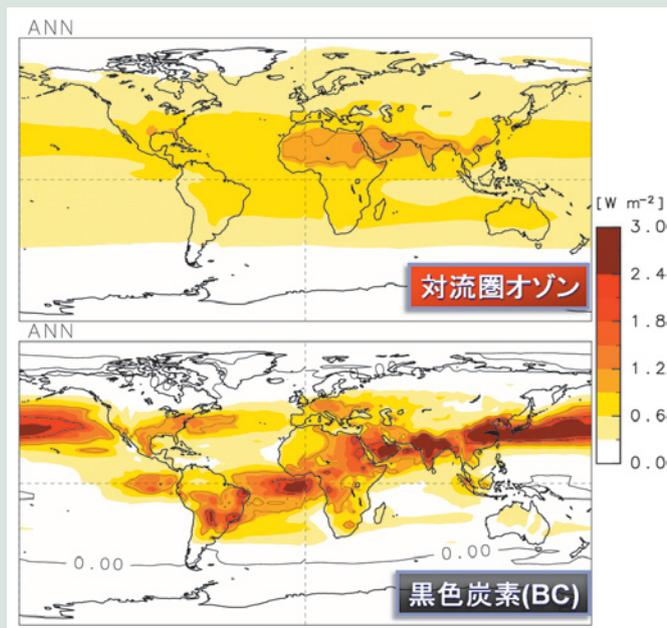


図1 化学気候モデルにより計算された大気汚染物質（オゾンおよび黒色炭素粒子）による放射強制力（温暖化影響の指標）の分布。（参考：二酸化炭素による放射強制力は、平均して約 $1.5 \text{ W m}^{-2}$ である。）

私が生まれた1970年代は、日本や北米において光化学スモッグなどの大気汚染が最も深刻な時期でした。その後、先進国では排出規制などの対策が施され、窒素酸化物、硫黄酸化物、一酸化炭素などといった大気汚染物質の排出量の傾向は、減少に転じたものの、中国を中心とする東アジアなどの領域では、経済発展に伴い、汚染物質の排出量は顕著に増加してきていることが明らかになっています。

このような汚染物質の増加は、大陸～半球規模の長距離大気輸送を介して、遠く離れた地域にまで影響を及ぼすため、地球規模の“大気質”（Air Quality）の問題として定量的な評価が求められています。さらに、大気汚染物質のなかには、気候に影響するものが少なからず含まれることにも注意が必要です。一般的には、気候変動に関与する物質として、二酸化炭素（ $\text{CO}_2$ ）などの長寿命の温室効果気体を取り上げられることが多いですが、地球温暖化に象徴されるような近年の気候変動には、オゾンや浮遊粒子（エアロゾル）などの大気汚染物質も深く関与していることが最近の研究により明らかになってきています。

例えば、光化学スモッグの主成分であるオゾンはメタンに匹敵する重要な温室効果気体であり、石炭やバイオマスの燃焼などから放出される黒色炭素エアロゾル（スス）は、太陽光を吸収し大気を加熱するので、それぞれ温暖化を顕著に加速させる効果を持つことが分かってきました（図1）。一方で、硫酸塩などの吸湿性を持った粒子状汚染

物質は、太陽光を反射し、温暖化を抑制する働きがあります。また、このような粒子は雲生成の核として機能するため、雲を増加させ、さらなる地球冷却効果を及ぼす可能性もあります。

以上のように、大気汚染の地球規模の輸送・拡散と、これによる気候への影響は、なかなか複雑なものなのですが、各種気体成分やエアロゾルの輸送・化学反応・沈着過程・放射過程をできるだけ忠実に計算可能な化学・エアロゾル気候モデルを構築し、これを用いた数値シミュレーションによって、実際の気候変動のメカニズムを明らかにしようと日々研究を進めています。



キルギス共和国・アルマータから中国大陸の汚染大気層を望む。

# 水を使って絶縁体から効率のよい熱電材料を作製

太田 裕道 大学院工学研究科准教授

私たちの生活で日常的に使われるエネルギーの大部分は、廃熱として活用されないまま環境に放出されています。このように排出される廃熱を電気に変えることができる熱電材料は、温度差を与えると発電し、逆に、電気を流すと冷えるという性質を示すことから、発電素子や冷却素子としての利用が可能です。現在の熱電材料は、一般的にビスマスとテルルなどの重金属からなる化合物であり、地球上における埋蔵量が少なく、毒性があり、耐熱性が低いといった諸問題があるため、応用範囲が限られています。

こうした背景から、私たちは埋蔵量が豊富で、毒性がなく、耐熱性の高い、人工宝石としても知られるありふれた酸化物、チタン酸ストロンチウムに注目して研究を行っています。2007年1月、私たちは、チタン酸ストロンチウムにニオブを混ぜ込むことで金属とし、これを厚さ0.4ナノメートルの極薄シートにすることで従来の重金属の2倍の熱電性能を達成しました [1]。この極薄金属チタン酸ストロンチウムは希少・毒性金属などを使用することなく廃熱を電気に変える熱電材料として大いに期待されていますが、900度の高温で人工的に原子を積み重ねる手法は製造コストが極めて高く、実用化できないという大きな問題がありました。

この問題を解決するために試行錯誤した結果、

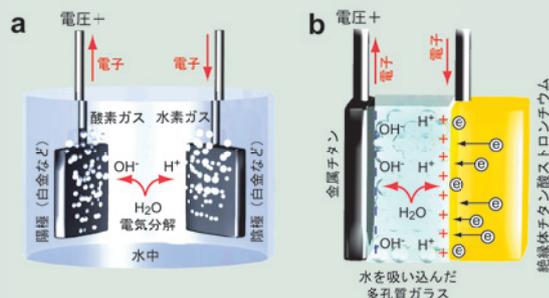


図1 水の電気分解によるチタン酸ストロンチウム表面の金属化  
 (a) 水の電気分解では、水中に入れた2枚の金属板に電圧を加えることで水を水素と酸素に分解します。  
 (b) 本研究の多孔質 C12A7ガラスを絶縁体チタン酸ストロンチウム上に堆積させて電圧を加えると、電界効果によってわずかに電気が通るようになったチタン酸ストロンチウムが水の電気分解用の電極となり、多孔質 C12A7ガラス中の水が電気分解します。電気分解で生成した H<sup>+</sup>イオンがチタン酸ストロンチウム表面を金属化します。(JST、名大、東大、東工大、JFCC の共同研究)

私たちは「水」の電気分解を利用することで簡単でかつ安価に大きな熱電効果を示す極薄金属チタン酸ストロンチウムを作製することに成功しました (図1) [2]。具体的には、「水」として、スポンジのように水を吸い込んだ多孔質 C12A7ガラスを用いました。C12A7はアルミナセメントの構成成分として知られ、極めて資源が豊富で価格の安い物質です。この多孔質 C12A7ガラスを絶縁体であるチタン酸ストロンチウムの単結晶上に厚さ200ナノメートル堆積させ、さらに金属チタンを蒸着した後、金属チタンとチタン酸ストロンチウムの間に電圧を加えます。小さな電圧で絶縁体チタン酸ストロンチウムの表面がわずかに電気を通すようになり (C12A7ガラスの電界効果 [3])、さらに大きな電圧を加えると多孔質 C12A7ガラス中の「水」の電気分解が起こり、生成した H<sup>+</sup>

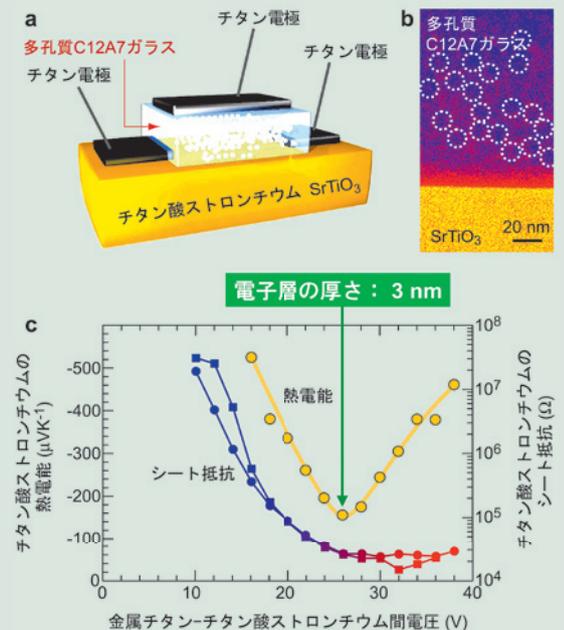


図2 水電気分解と熱電効果  
 (a) スポンジのように水を吸い込んだ多孔質 C12A7ガラスを、金属チタンとチタン酸ストロンチウムで挟んだ構造。(b) 走査型透過電子顕微鏡 (暗視野) 像には直径約 10nm の暗いスポット (孔) が見られます (分かりやすいように白い円で囲んであります)。(c) チタン酸ストロンチウムの熱電能 (=ゼーベック係数) とシート抵抗の電圧依存性。金属チタン-チタン酸ストロンチウム間電圧の増加に伴って、シート抵抗は減少し続けます。熱電能の絶対値もいったん減少する傾向を示しますが、26V 以上の電圧でV字回復することが分かります。(JST、名大、東大、東工大、JFCC の共同研究)

	従来の重金属熱電材料	従来の極薄金属シート	今回の極薄金属シート
構造			
熱電特性	ペルチェ素子などとして既に実用化されている	極薄金属層はバルクの5倍の熱起電力、重金属の2倍の性能指数	← (同程度)
資源	× テルルが極めて少なく、高価	豊富で安価	←
毒性	× 融点が低く酸化しやすいので高温では使用不可	熱的・化学的に安定	←
作製手法	簡便な粉末冶金	× 900度で人工的に原子を積み重ねる(高コスト)	多孔質ガラスを室温で形成し、僅かな電流で電気分解(安価)

図3 熱電材料の構造、熱電特性、資源、毒性、作製手法の比較表

テルル化ビスマスに代表される従来の重金属熱電材料は、すでにペルチェ素子などとして実用化されるなど熱電特性は優れていますが、資源が少なく、毒性があるという点で実用化が限定的です。2007年1月に発見した厚さ0.4ナノメートルの極薄金属シートは、資源が豊富で毒性がなく、バルクの5倍の熱起電力、重金属の約2倍の性能を示しますが、900度の高温で人工的に原子を積み重ねるといった従来の手法では実用化が不可能でした。今回の極薄金属シートは、絶縁体の上に多孔質ガラスを室温で形成し、僅かな電流で電気分解するだけという安価で簡便な手法で作製することができ、人工的に積み重ねたものと同様の性能を示すので、実用的な熱電材料の創製手法として期待されます。(JST、名大、東大、東工大、JFCCの共同研究)

イオンがチタン酸ストロンチウムと電気化学的に相互作用することで、大きな熱電効果を示す、厚さ3ナノメートル以下の極薄金属チタン酸ストロンチウムが生成します(図2)。

金属チタンとチタン酸ストロンチウムの間の電圧を大きくすると、チタン酸ストロンチウムの表面に電子が溜まり、温度差をつけたときの電圧に相当する熱電能(=ゼーバック係数)がいったん減少しますが、さらに大きな電圧を加えると熱電能の絶対値が上昇します。この大きな熱電効果の起源は現在のところ明確ではありませんが、人工的に原子を積み重ねて作られる厚さ0.4ナノメートルのチタン酸ストロンチウムの大きな熱電効果と同様に、水の電気分解によって生成する極薄の金属層が鍵であることは間違いないでしょう。この極薄金属層の熱電性能は、従来のビスマス、アンチモン、鉛、テルルといった希少・毒性金属などを使用した熱電材料の約2倍(注:極薄金属層のみ、室温の性能指数として)と見積もられます(図3)。

本手法は、室温で「水」の電気分解を行うだけという極めて簡便かつ安価ででき、材料であるチタン酸ストロンチウムは環境に優しい安全な酸化

物であることから、真に実用可能な熱電材料の創製手法として期待されます。将来的に本手法を応用した熱電材料が廃熱を利用した発電プロセスなどに利用されることで、低炭素社会の実現にも貢献できるかもしれません。また、電子材料における「水」を利用する本手法は、まったく新しい電子デバイス創製の道を拓くことでしょう。

- [1] H. Ohta *et al.*, *Nature Materials* **6**, 129 (2007).
- [2] H. Ohta *et al.*, *Nature Communications* **1**: 118 doi: 10.1038/ncomms1112 (2010).
- [3] H. Ohta *et al.*, *Applied Physics Letters* **95**, 113505 (2009).

1996年名古屋大学大学院工学研究科博士前期課程修了、1996年—1997年三洋電機(株)、1998年—2003年HOYA(株)、1999年—2004年JST—ERATO 細野透明電子活性プロジェクト出向、2003年から名古屋大学大学院化学・生物工学専攻助教授(2007年から准教授)、2008年からJST さきがけ領域研究者(兼任)、工学博士:2001年東京工業大学。受賞:応用物理学会講演奨励賞(2000年)、応用物理学会論文賞(2010年)など。機能性酸化物の持っている本当の物性を知り、世の中で本当に役に立つ電子デバイスを開発したいと考えています。

おおた ひろみち



## 高等教育マネジメント分野創設10周年記念シンポジウムを開催

●大学院教育発達科学研究科

大学院教育発達科学研究科高等教育マネジメント分野は、12月14日(火)、文系総合館カンファレンスホールにおいて、同分野創設10周年記念シンポジウム「大学職員と大学院－高等教育マネジメントプログラムの課題と展望－」を開催しました。

早川教育発達科学研究科長のあいさつで始まったシン



会場の様子

ポジウムでは、山本眞一広島大学高等教育研究開発センター長、金子元久国立大学財務・経営センター研究部長、潮木守一本学名誉教授、今津孝次郎本学名誉教授、胡建華南京師範大学教育科学学院長が、それぞれ大学職員の能力開発の課題やそこにおける大学院の役割、さらに大学職員を対象とする大学院におけるさまざまな教育実践の試みなどについて発表しました。

続いて行われた討論では、報告者のみならず会場の参加者からも活発な発言が続き、大学職員の専門化の将来展望、大学職員を対象とする大学院教育の可能性と限界、大学院修了者の処遇、中国の視点からみた日本の大学院教育の課題などをめぐって白熱した議論が行われました。

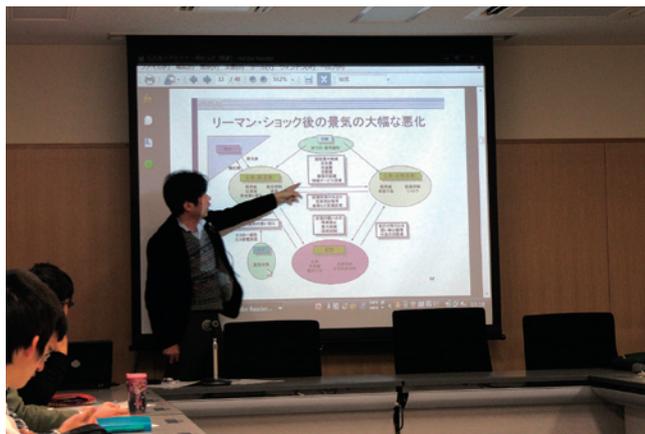
満席となった会場には、大学院高等教育マネジメント分野の修了生・在学生とともに、全国各地から参加した多数の大学職員の姿が見られ、大学院教育に対する大学職員の関心の高さをうかがわせるシンポジウムとなりました。

## 経済学研究科セミナーを開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科は、12月21日(火)、経済学研究科セミナーを開催しました。

今回は、竹内淳一郎日本経済研究センター研究本部主任研究員による「当面の景気展望～就職市場を巡る環境と合わせて」と題した講演が行われました。今回の講演は、竹内主任研究員の活動を知った学生のリクエストにより実



講演する竹内主任研究員

現したものです。日本経済研究センターは、『日本経済新聞』に定期的に景気予測を発表しており、経済界から信頼できる景気予想としての評価が確立していますが、竹内主任研究員はその予測活動の中心を担っています。

竹内主任研究員は、豊富な資料を使って、今年の景気動向に関しての最新予想や、日本経済が陥っている「低成長の罠」について、わかりやすく講演しました。さらに、学生の求めに応じて、社会人の先輩として、就職を巡る環境と、よりよい就職活動のためのアドバイスも行いました。

景気の動向と就職活動の困難さは密接に関連していることから、当日は、就職を控えた学部生が多数参加し、熱心に聴講していました。

## 名古屋公共経済学・マクロ経済学コンファレンス2010を開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科は、12月26日(日)、経済学部第1会議室において、名古屋公共経済学・マクロ経済学コンファレンス2010を開催しました。

午前には、玉井寿樹近畿大学経済学部准教授、宮澤和俊同志社大学経済学部教授が、午後には、山本庸平アルバータ大学ビジネススクール助教授、篠崎 剛東北学院大学経



会場の様子

済学部准教授、敦賀貴之京都大学経済学研究科准教授が、それぞれ現時点における最新の研究成果を発表しました。

発表は、「経済理論に基づいた分析フレームワークと、現実に観察されるデータを用いた実証的な視点を融合させる」という趣旨に沿って、経済理論を駆使した緻密な分析、計量分析の地平を広げる手法的貢献、詳細なデータを用いた厳密な実証研究とがバランスよく組み合わせられたものでした。

また、報告された5つの論文が、いずれも日本及び世界の経済が抱える課題の解決へと結びつく高い問題意識を持つもので、学会においてしかるべき位置を占める査読付き英文学術雑誌への公刊に向けた改訂を行っていく上で、有意義なフィードバックを得る場となりました。

カナダから1名が参加したほか、北は仙台から南は福岡までの約30名の参加がありました。

## 平成22年度オープンシンポジウムを開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、1月7日(金)、シンポジオンホールにおいて、平成22年度オープンシンポジウム「脳画像：脳とこころの何がわかるか」を開催しました。

同シンポジウムは、脳とこころの疾患の統合的な解明を目指して、昨年度、医学部保健学科に導入された高磁場磁気共鳴装置 (MR)、脳磁計装置 (MEG) に関する応用研



講演する伊藤部長

究を紹介するために開催されたもので、200名を超える一般の方々、学内研究者、その他医療機器関係企業等が参加しました。

濱口総長及び祖父江医学系研究科長のあいさつに始まり、礪田治夫医学部保健学科教授からMR装置及びMEG装置の紹介が行われた後、木村健太環境学研究科助教による「脳とからだの密接な関係-脳画像によるストレス研究-」、尾崎紀夫医学系研究科教授による「うつ病について、わかっていること、わかる必要があること」、大日方五郎エトピア科学研究所教授による「眼の動きからわかること-疲れ、注意、集中力-」、最後に、伊藤健吾国立長寿医療研究センター脳機能画像診断開発部長による「認知症を画像で診る-早期診断から治療への貢献まで-」と題した講演が行われ、参加者は熱心に聴き入っていました。

今後は、大学院医学系研究科を中心に、MR装置、MEG装置を利用した共同研究の推進とともに、脳とこころの疾患の克服を目指した地域連携型研究コンソーシアムの構築が期待されます。

## 第3回医学・バイオ系知財フェアを開催

### ●医学部

医学部は、12月17日(金)、医学部附属病院において第3回名古屋大学医学・バイオ系知財フェアを開催しました。

同フェアは、本学が医学・バイオの学術分野において、平成16年の法人化以降に250件以上の特許を出願していることから企画されたもので、本学及び近隣大学の出願特許を企業や研究機関関係者に広く公開し、共同研究等により



ブース展示の様子

一層の産学官連携を推進することを目的としています。

3回目の開催となった今回は、企業・研究機関の研究開発担当者を中心に、150名以上の来場がありました。

講演の部では、宮本政臣生化学工業株式会社常務執行役員から、医薬品の研究開発の成功確率を向上させるための方法論について講演がありました。引き続き、直江知樹医学系研究科教授及び湯澤由紀夫藤田保健衛生大学医学部教授から、本学の代表的な医薬・創薬研究の成果について講演がありました。会場では、熱心にメモを取る参加者の姿があちらこちらで見受けられました。

展示の部では、7分野47件の特許のブース展示に加え、今年度から初めて、本学における技術移転可能な成果有体物の紹介が行われました。ブースでは教員、大学院生等による研究成果等の説明が行われ、多数詰めかけた企業の研究開発担当者との間で実用化に向けての相談等が行われました。フェア終了後も活発な意見交換が行われるなど、医学・バイオ分野における特許に対する高い関心と大きな期待がうかがえました。

## 第23回年代測定総合研究センターシンポジウムを開催

### ●年代測定総合研究センター

年代測定総合研究センターは、1月13日(木)、14日(金)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、第23回年代測定総合研究センターシンポジウムを開催しました。

同センターは、学内外を問わず、地球誕生から現代にいたる年代範囲をカバーする年代学研究、放射性炭素 C-14 トレーサーを用いる環境炭素動態研究に関する共同利用に

貢献しています。

シンポジウムでは、まず、同センターの年代測定設備に関する平成22年の現状と利用の紹介があった後、本学の他、京都大、岐阜大、静岡大、東北大、日本大、名古屋市環境科学研究所などの研究者による共同利用研究の成果として、環境学、考古学、地質学、文化財科学、人類学などの分野に関する口頭発表27件、ポスター発表10件が行われました。

また、青木周司東北大学理学研究科教授は、大気球を用いた成層圏大気観測の最新の研究成果について、特に、成層圏大気酸化炭素の C-14濃度の経年変動とその原因について、小元久仁夫 元日本大学文理学部教授は、45年間に及ぶ C-14年代測定研究の実績と、南極から琉球諸島に至るフィールドワークの研究成果について特別講演をしました。

研究者、学生、一般の方など合わせて78名の参加があり、講演や総合討論において、活発な質疑応答、意見交換が行われました。シンポジウムの内容は、業績報告書として3月中旬に刊行される予定です。



講演する小元教授

## アメリカ大学院留学シンポジウムを開催

●留学生センター

留学生センター海外留学室は、12月22日(水)、CALEフォーラムにおいて、国際化拠点整備事業海外留学促進イベント「アメリカ大学院留学シンポジウム」を開催しました。同シンポジウムは、アメリカに留学中の現役日本人大学院生と、博士号を取得し世界的な国際機関で活躍する研究者を招き、学生の視点で捉えた「アメリカ留学」の基本



会場の様子

情報や、その後の就職情報等を紹介するもので、当日は、留学に興味を持つ本学及び他大学の学生、教職員など約60名の参加がありました。

最初に、岩城奈巳留学生センター准教授からシンポジウムの主旨について紹介があり、続いて、国際部職員から日本学生支援機構の留学生交流支援制度について説明がありました。

その後、4名の留学経験者から自らの留学体験に基づいて、留学の動機、日米における大学院教育・システムの違い、入学審査方法、学生生活、金銭事情、語学能力試験の攻略法や奨学金の獲得法、ティーチング・リサーチアシスタントのポジション獲得法、コースワークシステム、学会、留学のメリット・デメリットや意義、海外での就職活動と就労について等、多岐に渡る内容について説明がありました。

最後に、座談会が行われ、友好的な雰囲気の中で、学生が盛んに質問や相談をする姿が見受けられました。

## グリーンモビリティ連携研究センターの看板上掲式を挙

●グリーンモビリティ連携研究センター

グリーンモビリティ連携研究センターは、1月4日(火)、名古屋大学グリーンモビリティ連携研究センターの看板上掲式を挙行了しました。

同センターは、今年1月1日付けで、環境への負荷が少なく、安全かつ安心な交通手段及びシステムを意味する“グリーンモビリティ”に関するイノベーションの実現に向けて、産学官連携及び国際連携のもと、革新的技術を創



上掲式の様子

出するための研究開発の促進及び当該分野を先導する研究者等の人材育成を図ることを目的として設置されました。

上掲式は、濱口総長、宮田理事、鈴置工学研究科長、山口環境学研究科長、大西情報科学研究科長、高井エコトピア科学研究所長等関係者の列席のもと挙行されました。

上掲式後に行われた記者会見では、宮田理事からあいさつ及び構成員の紹介があった後、大日方五郎エコトピア科学研究所教授から、同センターの概要等について説明があり、引き続き、質疑応答が行われました。

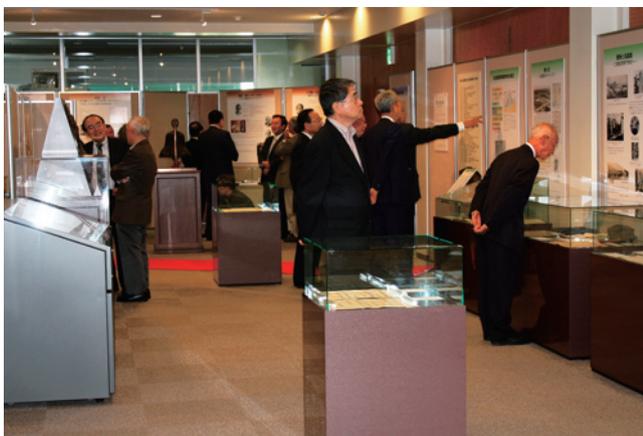
東海地域は、世界有数の輸送機器産業集積地であり、輸送機器産業の未来を支えるグリーンモビリティに関する学術領域は、材料工学、機械工学、電気工学、情報工学、交通工学、社会科学等の従来の枠組みを超えた融合研究領域となっています。これらの実践には、学部及び専攻を超えたセンターを構築し、さらにセンターを中核拠点とし、産学連携、学学連携、国際連携を先導することが不可欠であり、この融合研究を通し、グリーンモビリティ分野における世界トップの国際競争力確保への貢献及び国際的に活躍できる研究者・技術者の育成に向け、強力に推進していく予定です。

## 第20回博物館企画展「響け！創統の鐘」を開催

●博物館

博物館は、11月3日(水)から12月18日(土)まで、同館展示室において、第20回博物館企画展「響け！創統の鐘－名高商から名大経済学部までの90年－」を開催しました。

この企画展は、大正9年に創立された名古屋高等商業学校(名高商)を前身とする経済学部の歴史を、昭和34年の東山キャンパス移転前の桜山キャンパスを中心に紹介した



展示室の様子

もので、経済学部同窓会であるキタン会や大学文書資料室によって収集された、当時を語る多くの貴重な物品や写真が展示され、3,246名の入場者がありました。

タイトルである「創統の鐘」も戦時中の金属供出を逃れ、展示されました。「創統の鐘」とは、大正13年に第1回卒業生によって名高商に寄贈されたもので、校内の其湛塔の頂上に設置された名高商のシンボルの鐘です。「創統」とは「孟子巻一」の「君子創業垂統(君子業を創め統を垂れる)」という一文から取られたもので、創業者は後世の者が事業を成功させてくれるものと信じて、今に最善を尽くしてそれを伝えればよい、という意味です。

なお、この企画展は、キタン会による経済学部創立90周年記念事業の1つでもあり、11月6日(土)には、豊田講堂で経済学部創立90周年記念式典が開催され、その出席者にも好評を博しました。

## 博物館特別企画「恐竜たちがやってきた」第2弾を開催

●博物館

博物館は、10月5日(火)から12月28日(火)までの間、同館展示室において、「恐竜たちがやってきた－化石から学ぶ過去の生物多様性－」の第2弾として、古生代の陸と海の生物化石の展示を行いました。

古生代始めのカンブリア紀の代表的な化石群として有名なカナダのバージェス頁岩や中国 雲南省の澄江の化石、



多種のウミユリ化石標本

アメリカ ペンシルバニア州の石炭紀のシダ植物化石、アメリカ イリノイ州の保存状態の良いウミユリ化石などを展示し、海洋や陸上生物群がどのように誕生し、進化したかについて解説をしました。また、第1弾で行った中生代の化石標本である恐竜類やアンモナイトの展示も引き続き行いました。

12月4日(土)には、鈴木雄太郎静岡大学理学部講師による「古生代の生命 節足動物の成功への軌跡」と題した講演会が開催されました。

鈴木講師は三葉虫を始めとする古生代の節足動物研究の第一人者で、スウェーデンや北上山地の材料などを中心に研究しています。講演では、古生代前半に、特に繁栄した三葉虫を中心に、節足動物がいかに古生代の海の中で成功者として進化したのかについてわかりやすく紹介しました。

なお、博物館では、1月11日(火)より3月31日(木)まで、第3弾として「こんな化石が見つかるの? 例外的に良好に保存された化石群特集」と題した展示を行っています。

## 和式馬術部による流鏝馬供覧を開催

●博物館

博物館は、12月19日(日)、教育学部附属中・高等学校のグラウンドにおいて、和式馬術部による流鏝馬などの和式馬術の披露を行いました。

当初、10月31日(日)に開催する予定が、台風の影響で延期になっていたもので、当日は200名近くの来場者がありました。演武内容は毎年恒例の流鏝馬、高校生演武に加え、



流鏝馬の様子

え、馬場祓い、地上・馬上剣演武、地上・馬上槍演武、試合形式の打毬披露など多岐に渡り、多くの方に和式馬術を知ってもらう良い機会になりました。特に今回は流鏝馬の的中率が高く、部員が的を射抜くたびに会場からは歓声が上がっていました。

また、初めて試合形式で行った打毬は、珍しいスポーツであることから多くの参加者が熱心に見ていました。演武後には、体験乗馬や馬との触れ合いコーナーもあり、幅広い世代の方々が日本の馬を体感していました。

次回は、今年の秋頃を予定しております。

## ミクロの探検隊「動物の体～組織～」を開催

●博物館

博物館は、12月24日(金)、医学部超微形態研究室において、ミクロの探検隊「動物の体～組織～」を開催しました。これは大学院医学系研究科附属医学教育研究支援センター分析機器部門との共催で行ったもので、当日は、抽選で選ばれた小学5年生から一般の方々まで19名が参加しました。



電子顕微鏡を操作する参加者

最初に、参加者はタマネギの細胞と自分の口腔粘膜細胞の標本を作り、生物顕微鏡で観察しました。その後、マウスの腎臓、空腸、心筋などの組織標本を観察し、組織の形と動きの関係などについて解説を聞きました。

引き続き、電子顕微鏡の原理などの説明を受けた後、透過型電子顕微鏡と走査型電子顕微鏡を各自で操作して、腎臓、小腸、心筋の観察、撮影を行いました。最後に、撮影した電子顕微鏡写真を使ってポストカードを作製しました。

どの参加者も熱心に観察しており、「楽しかった、また参加したい」との感想も聞かれました。

## 名大を表敬訪問された方々 [平成22年10月16日～平成23年1月15日]

日付	国/地域	訪問者	目的
10月26日	ノルウェー	ノルウェー環境省よりソーレンセン副大臣ほか3名	生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）期間中の表敬訪問。太陽地球環境研究所の視察及び表敬あいさつ
10月27日	フランス	ストラスブール大学よりベレッツ学長ほか3名	大学間学術交流協定の調印式及び今後の連携についての意見交換
10月29日	台湾	国立中興大学より邱人文社会科学センター長ほか1名	表敬あいさつ及び学術交流協定についての意見交換
11月4日	モンゴル	モンゴル科学技術大学よりオユン地質・石油工学部長、チュルウン教授	表敬あいさつ及び連携強化についての意見交換
11月8日	韓国	浦項工科大学校より白総長ほか1名 韓国総領事館より李総領事ほか1名	表敬あいさつ及び学術交流協定についての意見交換
11月15日	ベトナム	ファンベトナム大学協会副議長ほかベトナムの大学長等10名、国営テレビ関係者3名	日・ベトナム学長会議出席の後の表敬訪問。表敬あいさつ、本学概要説明、ベトナム人留学生を交えての意見交換
12月1日	フランス	パリ第13大学よりブロック教授ほか4名	学術交流協定についての意見交換
12月2日	中国	江蘇省卓越国際交流教育基金会より王理事長ほか9名	留学先の調査及び留学に関する提携に向けた意見交換

## 新たに締結した学術交流協定 [平成22年10月16日～平成23年1月15日]

### 大学間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名
9月15日	アメリカ合衆国	ノースカロライナ大学チャペルヒル校
11月30日	スペイン	バルセロナ大学

### 部局間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名	部局名
10月3日	中国	中国人民大学法学院	大学院法学研究科
10月18日	台湾	国立中正大学法学院	大学院法学研究科
11月15日	ガーナ	ガーナ大学社会科学院	大学院国際開発研究科
11月30日	中国	瀋陽工業大学	大学院工学研究科

構成員を対象とした研修 [平成22年10月16日～平成23年1月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
9月15日(水) ～12月8日(水)	平成22年度国際業務トレーニング 「英文Eメール添削研修」	普段から英文メールを書いている中上級者を対象に、実際に英文メールを作成し、講師の添削を受けることにより、ビジネス英文Eメールの作成スキルを身につけることを目的とする。	20名
10月1日(金) ～10月10日(日) 11月8日(月) ～11月12日(金) 11月18日(木) ～11月25日(木)	平成22年度民間企業派遣研修 〈研修先〉 名古屋国際センター 名鉄グランドホテル 大垣共立銀行	今後の名古屋大学を支える有能な人材を民間企業に派遣し、柔軟かつ迅速な業務対応について学ぶと共に、民間企業の在り方との比較から、今後の名古屋大学の発展に必要な改善点を見いだせる人材を養成することを目的とする。	派遣先に 各1名
10月26日(水)	平成22年度国際業務トレーニング 「租税条約セミナー」	外国人研究者の受け入れ及び租税条約手続に係る業務を担当している職員を対象に、租税条約の概要及び実践的な知識等を身につけることを目的とする。	65名
11月4日(木)	平成22年度事務系職員企画力向上研修	所属部署の業務上の問題点、要改善点を出し合い、それらを業務改善企画からパワーポイント、エクセル等を使った資料による提案に至るまでの方法について学び、意欲ある若手職員の企画力向上に必要な能力を養成することを目的とする。	19名
11月10日(水)	メンタルヘルス講習会	職員の安全衛生の観点から、昨今増え続けている「心の病」についての症例とその対応に関し理解いただき、少しでも「心の病」の職員を減少させることを目的とする。	約180名
11月11日(木)	第64回特許基礎セミナー	特許出願が未経験で、今後、出願したい、特許出願に興味を持っている教職員、研究者、大学院生等が、特許基礎と特許調査の仕方を習得する。	7名
11月24日(水)	平成22年度図書系職員研修 「講習会スキル」	電子リソースの利用促進を図るため、外部講師を招き、利用者向け講習会のスキルを学ぶ研修を行い、図書系職員の講習会開催や検索指導の向上を目指す。	21名
12月1日(水)	第3回鶴舞知的財産セミナー	先端医療に係る知的財産権に興味がある教職員、研究者、大学院生等が、先端医療(再生医療、核酸医薬、分子標的薬など)特許の世界動向と特許出願基礎を習得する。	63名
12月6日(月)	平成22年度図書系掛長研修(初級)	昇任後2年未満の図書系掛長が、附属図書館を取り巻く状況を理解するとともに、掛長として必要な図書館・図書室運営に関する基本知識を深めることを目的とする。	6名
12月6日(月) ～12月10日(金)	平成22年度(後期) 医療安全管理・感染対策研修	病院従業者の医療安全管理及び院内感染対策に対する意識を高め、業務を遂行する上での技能やチームの一員としての意識の向上を図る。	約2,300名
12月7日(火)	平成22年度国際業務トレーニング 「効果的な英文Eメールの書き方 (応用編)」	「効果的な英文Eメールの書き方」を受講した職員を対象に、ケーススタディを通じてビジネス英文Eメールを作成するために必要となるスキルを身につけることを目的とする。	30名
12月24日(金)	平成22年度 事務系マネジメントセミナー	事務系管理職員等を対象に、他機関の実例を踏まえた組織の変革や業務改善への組織的な取組み及びLIFO(ライフォ)診断を活用した自己確認と良好な対人関係の構築について理解し、事務改善合理化に活かすことを目的とする。	88名

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成22年12月16日～平成23年1月15日]

記事	年月日	新聞等名
1 現代日本誤百科 (358)：固い「決意を翻意できず」町田 健文学研究科教授	12.16 (木)	中日 (朝刊)
2 医学部附属病院はロボット手術での前立腺がん治療を行っている病院の一つとして挙げられる	12.16 (木)	朝日 (朝刊)
3 生理学研究所主催シンポジウム「神経科学神話を超越して」開催：18日 池内 了本学名誉教授がパネリストとして参加	12.16 (木)	朝日 (朝刊)
4 本学は中京銀行と産学連携協定を結ぶ	12.16 (木)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊) 日刊工業
5 本学は「グリーンモビリティ連携研究センター (仮称)」を2011年1月に設立する	12.16 (木)	日刊工業
	12.25 (土)	中日 (朝刊)
6 伊藤秀章エコトピア科学研究所特任教授らが発起人となりレアメタル再生技術の研究会が発足する	12.17 (木)	中日 (朝刊)
7 朝日カルチャーセンター新講座：「重力波で見る宇宙～宇宙の始まりからブラックホールまで」杉山 直理学研究科教授	12.17 (木)	朝日 (朝刊)
8 ニュースはてななるほど：松岡 信生物機能開発利用研究センター教授らが開発した新品種のコシヒカリが紹介される	12.18 (土)	中日 (朝刊)
9 家森信善経済学研究科教授は、株式会社トーエネックが不正取引で関係者の処分を行っていたにも関わらず「法的な開示義務がない」として9ヵ月報道発表してこなかったことについて、「開示する情報を法令や基準だけで判断する時代ではない。開示する内容を考え、説明していく姿が望ましい」と話す	12.18 (土)	読売
10 後 房雄法学研究科教授は名古屋市長選への出馬要請を受けた石田芳弘氏の会談に同席する	12.18 (土)	中日 (朝刊)
11 瀧口総長は高等学校生向け推薦図書として「ローマ人の物語」を挙げる	12.18 (土)	中日 (朝刊)
12 近藤孝弘教育発達科学研究所教授は「ドイツでは日本と同様に『PISA (国際学力到達度調査) ショック』が起きた。教育関係者が危機感をあおり、教育予算が大幅に増えた」と話し、「日本でもドイツと同じく学力格差がある。底辺層を減らすことは、両国に共通する課題だ」と語る	12.19 (日)	朝日 (朝刊)
13 末松良一本学名誉教授は「からくりの知識に、独自の感性が加わり機械装置は進歩してきた」と話す	12.19 (日)	読売
14 この人：中西香爾本学特別教授のプロフィールが紹介される	12.20 (月)	中日 (朝刊)
15 現代日本誤百科 (359)：「海外での試合は特有」だ 町田 健文学研究科教授	12.20 (月)	中日 (朝刊)
16 きらり☆研究開発：澤 博工学研究科教授が行っている構造解析の内容が紹介される	12.20 (月)	読売
17 現代日本誤百科 (360)：両国の架け橋の「張本人」町田 健文学研究科教授	12.21 (火)	中日 (朝刊)
18 高井 治工学研究科教授は今年の文部科学省科学技術政策研究所「2010ナイスステップな研究者」に選定される	12.21 (火)	毎日 (朝刊) 日刊工業
19 若林俊彦医学部附属病院教授と宮地 茂医学系研究科准教授は患者本位の脳卒中医療について対談する	12.21 (火)	朝日 (朝刊)
20 岡本美紀さん、鈴木まり子さん本学学生は中日新聞「学生之新聞」の特集「走りきる達成感 気持ちいい」の学生取材スタッフを務める	12.21 (火)	中日 (朝刊)
21 現代日本誤百科 (361)：「自己陶醉する」町田 健文学研究科教授	12.22 (水)	中日 (朝刊)
22 森 郁恵理学研究科教授、鈴木 修氏本学卒業生は中日新聞「紙つぶて」の新しい執筆者となる	12.22 (水)	中日 (夕刊)
23 現代日本誤百科 (362)：「一気呵成に攻撃」する 町田 健文学研究科教授	12.23 (木)	中日 (朝刊)
24 あの人に迫る：平野真一元本学総長は本学の学風や教育への思い、自身の生い立ちなどについてインタビューを受ける	12.23 (金)	中日 (夕刊)
25 本学は次世代の研究者育成を目的として、赤崎 勇本学特別教授の名を冠した「赤崎賞」を創設する	12.25 (土)	中日 (朝刊) 読売
26 本学はモンゴル科学技術大学などと提携し、モンゴル国内でレアアースを含む鉱物資源の調査プロジェクトを始める	12.26 (日)	中日 (朝刊)
27 現代日本誤百科 (363)：「幸先が悪い」町田 健文学研究科教授	12.27 (月)	中日 (朝刊)
28 小林・益川理論のノーベル賞受賞を後押しするなど、その技術で基礎科学に貢献してきた日本の加速器がクローズアップされる	12.27 (月)	中日 (夕刊)
29 名大サロンの主役：「われらかく飲みかく語りき」をテーマに第100回目のサロンが開かれ、今回で一旦休止となる	12.28 (火)	中日 (朝刊)
30 野依良治本学特別教授、小林 誠同特別教授が首相官邸を訪問し、来年度の科学技術振興予算が菅 直人首相の指示で増額されたことに謝意を伝える	12.28 (火)	読売
31 ボタニカルアート作品展Ⅰ期-サークル作品- 開催：2011年1月11日～2月5日	12.28 (火)	中日 (朝刊)
32 飯田喜四郎本学名誉教授が委員長を務める名古屋城跡全体整備検討委員会は、本丸御殿等の復元技法について名古屋市の方針を了承する	12.28 (火)	読売
33 本学と三河地区の7つの信用金庫は環境関連などの次世代産業の共同研究に乗り出す	12.29 (水)	日経 (朝刊)
34 大磯ユタカ医学系研究科教授は糖尿病の現状と最新の治療法についての座談会に出席する	12.29 (水)	中日 (朝刊)
35 教育学部附属高等学校チームが「エコノミクス甲子園」東海大会で優勝する	12.29 (水)	中日 (朝刊)
36 名古屋大学でオリオン星雲をみる会開催：1月22日	12.29 (水)	中日 (朝刊)
	1. 7 (金)	読売
37 2010年墓碑銘：植崎彰一本学名誉教授、山崎一雄本学名誉教授	12.31 (金)	中日 (朝刊)
38 飛躍のために 愛知を語る (上)：益川敏英本学特別教授は愛知県が飛躍するための課題を語る	1. 1 (土)	中日 (朝刊)
39 本学が作業部会に参加する「中部航空宇宙技術センター」が2011年度に小型電動飛行機的设计・開発に乗り出す	1. 1 (土)	中日 (朝刊)
40 吉田俊和教育発達科学研究所教授はルールやマナーについて、「現代は『これがルール』と社会が提案しなくてはならない。携帯のマナーも鉄道会社が頻りに訴えた結果」と話す	1. 1 (土)	日経 (朝刊)
41 瀧口総長は年頭所感で本学の目標を語る	1. 3 (月)	朝日 (朝刊)
42 奥宮正哉環境学研究科教授はこれからの住まいづくりについて語る	1. 3 (月)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成22年12月16日～平成23年1月15日]

記事	月日	新聞等名
43 益川敏英本学特別教授は新春ノーベル賞座談会に出席する	1. 4 (火)	日経 (朝刊)
44 現代日本誤百科 (364):「タッチの差の勝利」町田 健文学研究科教授	1. 4 (火)	中日 (朝刊)
45 予算の減額により、本学グローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」での海外研修が当初計画の半分の実現も難しくなり、神沢 博環境学研究科教授は「学生の視野を広げる狙いだったが残念」と話す	1. 4 (火)	読売
46 「グリーンモビリティ連携研究センター」の開所式が行われる	1. 4 (火)	日経 (夕刊) 毎日 (夕刊) 読売
47 本学などが、この10年「中部 ESD (持続可能な開発のための教育) 拠点」としてフォーラム開催等の取組みを重ねてきたことを踏まえ、愛知県が環境教育をテーマする国際会議開催誘致へと乗り出す	1. 5 (水)	中日 (朝刊)
48 現代日本誤百科 (366):「論戦を張る」町田 健文学研究科教授	1. 6 (木)	中日 (朝刊)
49 天声人語:只木良也本学名誉教授の「日本は国土の7割が森林だが、国民1人あたりで割ると、とたんに『貧林国』となる」という文章が引用される	1. 6 (木)	朝日 (朝刊)
50 大場裕一生命農学研究科助教らのグループはゲンジボタルの卵を光らせる酵素を発見する	1. 6 (木)	中日 (夕刊)
51 鈴木和博年代測定総合研究センター教授らのグループによる年代測定法を使った調査で、昨年豊田市の集落で死骸で見つかったキツネの死亡時期が1979年に絞り込まれる	1. 7 (金)	中日 (朝刊)
52 工学研究科附属複合材工学研究センターは2月に開催する講演会「複合材シンポジウム11」で発表する中小企業を募集する	1. 7 (金)	日刊工業
53 名大カフェ “Science, and Me” 第7回「“海の宝石” 貝のサイエンス」開催:13日	1. 7 (金)	中日 (朝刊)
54 現役本学学生が入試の心構えを伝授するサービスが盛り込まれた本学受験生向けの宿泊プランを名古屋東急ホテルが発売する	1. 7 (金)	日経 (朝刊)
55 小林 誠本学特別教授と益川敏英同特別教授が発起人代表となり、坂田昌一元本学理学部長がコペンハーゲン滞在中に家族とやり取りした手紙を刊行するための準備会が設立される	1. 7 (金)	中日 (夕刊)
56 紙つぶて: ドアラを科学する 森 郁恵理学研究科教授	1. 7 (金)	中日 (夕刊)
57 阿部文雄太陽地球環境研究所准教授らのグループは重力マイクロレンズ効果を利用したエリス・ワームホールの検証法を導出する	1. 8 (土)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 日刊工業
58 名古屋大学生協は学生食堂に「ハラルフード」と呼ばれるイスラム教の戒律を守ったメニューを導入する	1. 8 (土)	日経 (夕刊)
59 現代日本誤百科 (367):「話のさわり」だけですぐ理解する 町田 健文学研究科教授	1.10 (月)	中日 (朝刊)
60 高井 治工学研究科教授らは水溶液中でプラズマを利用し、ナノサイズの金属微粒子の高速合成、炭素等の表面改質をする技術の実用化にめどをつける	1.11 (火)	日刊工業
61 本学に「減災連携研究センター」が設立されるに至った背景にある東海地方の進まない地震対策について、福和伸夫環境学研究科教授は「地震が『わが事』と思われていないから施策も遅れ気味になってきた」と話し、「今、被害を減らす努力をしなければ、次世代に大きな損失を残す」と強調する	1.11 (火)	中日 (朝刊)
62 現代日本誤百科 (368):「失笑まじり」に対応する 町田 健文学研究科教授	1.11 (火)	中日 (朝刊)
63 岡本美紀さん本学学生は中日新聞「学生之新聞」の特集「ネットに導かれ現実へ」の学生取材スタッフを務める	1.11 (火)	中日 (朝刊)
64 高井 治工学研究科教授らは透明なダイヤモンドライクカーボン膜を樹脂板等にコーティングする技術を確立する	1.12 (水)	日刊工業
65 現代日本誤百科 (369):「日本人にとっての原風景」町田 健文学研究科教授	1.12 (水)	中日 (朝刊)
66 訃報:宮坂有勝本学名誉教授	1.12 (水)	日経 (朝刊) 他2社
	1.13 (木)	赤旗
67 大場裕一生命農学研究科助教は本学東山キャンパス内でホタルミミズを発見する	1.13 (木)	中日 (朝刊)
68 訃報:丹羽 淳本学名誉教授	1.13 (木)	中日 (朝刊) 他3社
69 レーザー:佐宗章弘工学研究科教授は「航空機関連の人材育成事業の専門組織を2011年度にも立ち上げたい」と話す	1.13 (木)	日刊工業
70 現代日本誤百科 (370):明日から「お買い求めできます」町田 健文学研究科教授	1.13 (木)	中日 (朝刊)
71 ミクロの探検隊「電子顕微鏡でみる野鳥のミクロ世界」開催:2月11日	1.13 (木)	中日 (朝刊)
72 本学で「中国とメディア」をテーマに読売新聞特別講座が開かれ、参加した胡晶坤さん本学学生は「ネットメディアのことは知らなかった。メディアと民主主義について考えさせられた」と話す	1.13 (木)	読売
73 仲々ふしぎ:濱口総長の姿勢・行動力について、伊勢高等学校時代からの友人 京セラミタ株式会社社長 駒口克己氏が共感を持って語る	1.13 (木)	日経 (朝刊) 関西版
74 大磯ユタカ医学系研究科教授、梶村益久医学部附属病院助教のグループは抗生物質「ミノサイクリン」がマイクログリアの活性化を抑制することによって浸透圧性脱髄症候群を予防することを発見する	1.14 (金)	中日 (朝刊)
75 防災・減災:福和伸夫環境学研究科教授はハザードマップで住まいを点検することを勧める	1.14 (金)	読売
76 毛利佳年雄本学名誉教授は磁化かんらん岩砕石を使って動植物の生育を早める手法を発見する	1.14 (金)	日刊工業
77 紙つぶて:線虫に学ぶ脳の働き 森 郁恵理学研究科教授	1.14 (金)	中日 (夕刊)
78 水田 洋本学名誉教授ら「名古屋市政の民主主義を守る十四人の会」が、住民投票に向け名古屋市議会解散に反対する街頭宣伝を行う	1.15 (土)	中日 (朝刊)
79 市民公開講座「耳からくるめまい、ふらつき、耳鳴—生活習慣との関連—」開催:2月18日 中島 務医学系研究科教授が講演	1.15 (土)	中日 (朝刊)

# イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**1月11日(火)～3月31日(木)**

場 所：博物館 2階展示室  
時 間：10:00～16:00  
休 館 日：日・月曜日  
入 場 料：無料

[問い合わせ先]  
博物館事務室 052-789-5767

## 博物館企画展

「恐竜たちがやってきた  
ー化石から学ぶ過去の生物多様性ー」  
テ ー マ：「第3弾：こんな化石が見つかる？  
例外的に良好に保存された化石群特集」



**2月8日(火)～3月5日(土)**

場 所：博物館 2階展示室  
時 間：10:00～16:00  
休 館 日：日・月曜日  
入 場 料：無料

[問い合わせ先]  
博物館事務室 052-789-5767

## 博物館企画展

「モンゴル書道展」  
テ ー マ：「草原の民モンゴリアンー伝統と現代社会の狭間で」

### 関連講演会

**2月19日(土)**

場 所：博物館 3階講義室  
時 間：14:00～16:00  
定 員：20名(博物館友の会10名、一般10名)  
テ ー マ：「ギャラリートークとモンゴル書道教室」  
講 演 者：オドントヤ・ビャンバ氏(書道家)



**2月18日(金)**

場 所：野依記念学術交流館  
時 間：13:30～18:00  
参 加 費：無料

[問い合わせ先]  
工学研究科附属複合材工学研究センター  
事務室 052-789-3112

## 工学研究科 附属複合材工学研究センター 複合材シンポジウム11

**2月18日(金)、3月12日(土)**

場 所：博物館 2階展示室  
時 間：14:00～15:00 (2/18)  
10:00～12:00 (3/12)  
入 場 料：無料

[問い合わせ先]  
博物館事務室 052-789-5767

## 博物館コンサート

テ ー マ：「モンゴル民俗音楽と伝統舞踊」(2/18)  
「フラメンコ」(3/12)

**2月24日(木)**

場 所：岡崎信用金庫本部 8階  
時 間：15:00～17:00  
参 加 費：無料

[問い合わせ先]  
しんぎん環境事業イノベーション寄附講座  
052-747-6550

## しんぎん環境事業イノベーション寄附講座 第10回企業経営者向けゼミナール

講演題目：「リチウムイオン電池の現状」  
講 演 者：佐野 充(環境学研究科教授)

**2月26日(土)～2月27日(日)**

場 所：博物館、蒲郡市生命の海科学館  
定 員：30名  
対 象：小学3年生から中学3年生と  
その保護者  
(中学生は個人参加可)  
参 加 費：1,000円

[問い合わせ先]  
博物館事務室 052-789-5767

## 名古屋市科学館共催事業 平成22年度第4回「地球教室」

テ ー マ：「鉱物をさがそう」



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

## 3月4日(金)

場 所：経済学部第2講義室  
時 間：13:00～17:30  
参 加 費：無料

## 国際開発研究科創立20周年 記念講演・記念シンポジウム

講演題目：「名古屋大学と国際開発研究の20年」  
講 演 者：小川英次氏（中京大学顧問）  
内 容：初代研究科長小川英次氏の記念講演と  
第3代研究科長中條直樹氏（本学名誉教授）らによる  
パネルディスカッション

[問い合わせ先]  
国際開発研究科 052-789-5066



## 3月4日(金)～3月5日(土)

場 所：環境総合館1階レクチャーホール  
時 間：9:30～18:30(3/4)、  
10:00～18:00(3/5)

## グローバルCOEプログラム 「地球学から基礎・臨床環境学への展開」 国際ワークショップ

テ ー マ：「伊勢湾流域圏における生態系保全と持続的開発」

[問い合わせ先]  
GCOE事務局 052-747-6548

## 3月4日(金)～3月6日(日)

場 所：全学教育棟北棟406 (3/4)、  
西尾市岩瀬文庫 (3/5、6)  
時 間：13:30～16:30  
参 加 費：無料

## 国際言語文化研究科 国際シンポジウム「日本研究における内外の視点」

[問い合わせ先]  
国際言語文化研究科  
助教 伊藤信博 052-789-5282

## 3月5日(土)、3月19日(土)

場 所：経済学部カンファレンスホール  
時 間：10:00～12:00  
参 加 費：無料

## 名古屋大学オープンカレッジ 「自由奔放！サイエンス」

講演題目：「田んぼの微生物を探る」(3/5)  
講 演 者：村瀬 潤（生命農学研究科講師）  
講演題目：「基軸通貨『ドル』の運命」(3/19)  
講 演 者：奥村隆平（経済学研究科教授）

[問い合わせ先]  
経済学研究科  
エクステンション・サービス  
ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp

## 【訂正とお詫び】

名大トピックス212号（2011年1月発行）で以下の誤りがありましたので、深くお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

25ページ・中「磯野太陽地球環境研究所研究員が南極出発前に総長を表敬訪問」

〔誤〕 ●博物館      〔正〕 ●太陽地球環境研究所

名大トピックス No.213 平成23年2月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

## 表紙

学食でランチをとる留学生  
(平成22年11月30日)

撮影協力：  
留学生センター  
BERGLUNDさん（左）  
（スウェーデン）  
MONTERRATさん（右）  
（スペイン）



## 106 第5代総長 篠原卯吉しのはら うきち — 名大をひきいた人びと⑩ —

第5代総長の篠原卯吉は、1903(明治36)年、現在の名古屋市に生まれました。県立第一中学校(現在の県立旭丘高等学校)を卒業して第八高等学校に進学、九州帝国大学工学部に入りました。26年、電気工学科を卒業すると同時に講師に任じられ、まもなく北海道帝国大学助教授となりました。

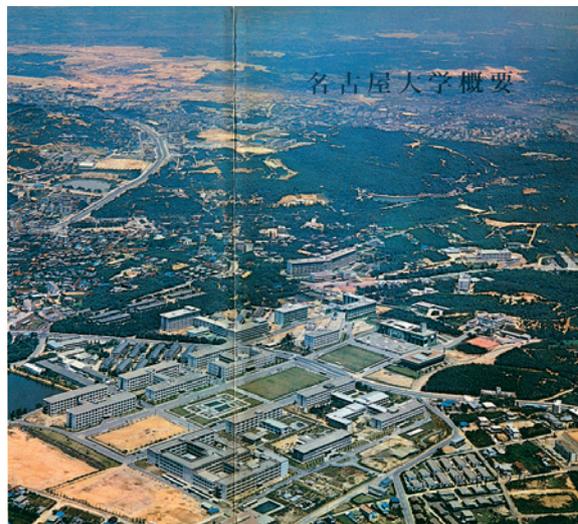
そして1940年(昭和15)年、その創設と同時に名古屋帝国大学理工学部(のち工学部)教授に就任しました。専門は高電圧工学で、日本の第一人者と目され、とくに高周波加熱に関する分野を切り開きました。のちにその技術は、ミシンや楽器などに広く用いられるようになります。しかしその篠原研究室も、やがて空襲を避けて、岐阜県高山市の高山航空工業株式会社などへの疎開をよぎなくされました。

敗戦後の篠原は、西二葉の仮校舎(現在の県立明和高等学校付近)を空襲で焼失し、東山の校舎建設も戦争で不十分なままであった工学部の復興に奔走しました。1953年に

工学部長となった篠原は、残された課題であった高蔵校舎(現在の名古屋市熱田区六野)の東山移転を56年に実現、教養部長をへて、63年7月に学長に就任します。

在任時代の大きな事績は、やはり名大が「たこ足大学」から脱却したことでしょう。1963年に教育学部、64年に大学本部・教養部、66年に農学部が移転を果たし、東山への主要施設の集結がほぼ完了しました。また、日本ヘラルド映画株式会社会長の古川為三郎・志ま夫妻の寄附を得て、64年に古川図書館(現在は博物館等が入っている古川記念館)が落成したことも特筆されます。

任期の後半、名大も大学紛争の時代に突入します。67年にいわゆる医学部紛争が起こり、69年には東山でも大学紛争の嵐が吹き荒れました。篠原学長は対応に苦慮し、健康も悪化したため、7月の任期満了を目前にした5月に無念の辞任となったのです。



1	3	2
4		

- 篠原卯吉第5代総長(1903-1993)。第八高等学校(名古屋市)から九州帝国大学という学歴は、初代から第4代までの総長が、いずれも第一高等学校、東京帝国大学の卒業者だったことに比べると異色といえる。電波技術審議会会長、電気学会会長も歴任。
- 新愛知(中日新聞の前身の1つ)1941(昭和16)年11月7日付夕刊。日本学術振興会の奨励金研究として選ばれた、篠原卯吉教授の「碍子の電氣的性質並にその不良度の研究」が紹介されている。開戦の1ヵ月前である。
- 『名古屋大学概要』(1968(昭和43)年度)の表紙の写真。大学本部、6学部、教養部などが集結し、現在の東山キャンパスの骨格ができています。
- 「篠原教授御退官記念号」として発行された、名古屋大学二葉会(工学部電気系学科同窓会)会誌『FUTABA』第3号(1969年12月)。

### 名古屋大学基金

名古屋大学基金へのご寄附をお願い申し上げます。この基金は、平成18年3月に創設され、学生育英事業、教育・研究環境整備事業、国際交流事業などの充実のために活用されます。ご寄附のお申し込み、お問い合わせは総務課(基金推進室)あて(電話 052-789-4993, 2011、Eメール kikin@post.jimu.nagoya-u.ac.jp) お願いいたします。